

2023年度成人科テキスト

「聖書日課と分かち合い」 2月号



名前

お知らせ

✧ 毎週、成人科を行っています。ぜひご出席ください。

10:15～10:50 地下フェロシップホールにて

✧ 受付で出席表に記入し、グループ分けの番号札を引いてから着席ください。

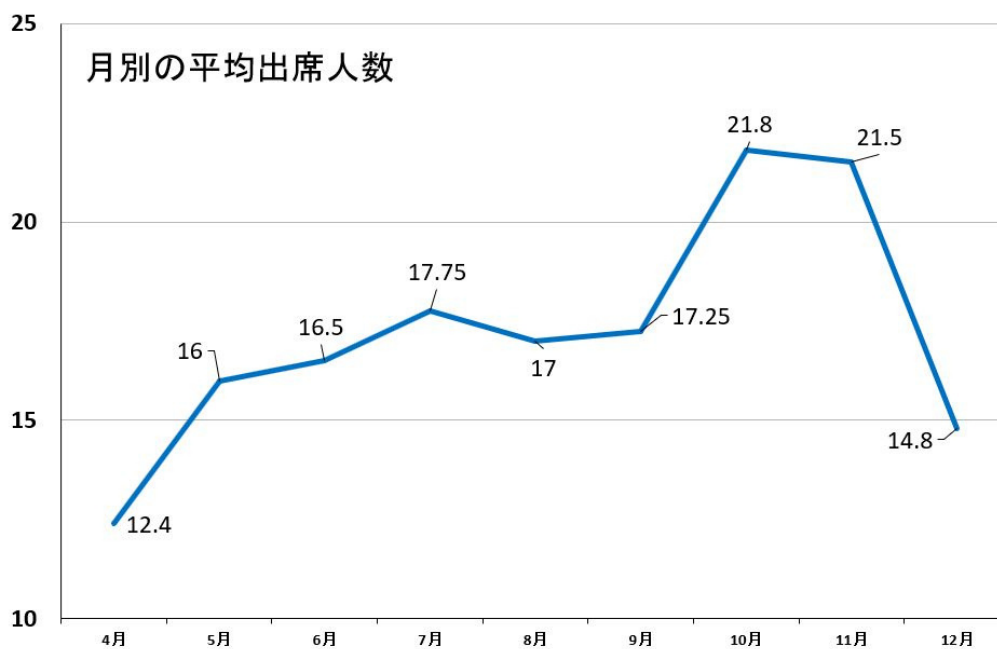
✧ 後から来られる方のために、前列への着席にご協力をお願い致します。

✧ 「聖書教育」誌の購読をお勧めしています。このテキストと併せて、ぜひお読みください。ご希望の方は事務室までお知らせください。

✧ このテキストのボックスへの配布をご希望される方は、担当者（岩崎秀子姉、宇佐美典子姉、郷健人兄）までお知らせください。

✧ ショートメッセージ動画は教会ホームページ上でも視聴できます。10:15のスタートには間に合わない・・・という方や、お休みされた方、もう一度聞きたいと思われる方など、ぜひご活用ください。

学びの輪を広げましょう！



礼拝と学びがバプテスト教会の二本柱。

テキストをお読みくださっている皆様も、ぜひ毎週日曜10:15～の成人科にご出席ください！

今月の執筆者

(左：ショートメッセージ 右：聖書日課)

45課：田中由記子姉 工藤征治姉

46課：郷 健人兄 栗山義亜兄

47課：渡部和子姉 宇佐美典子姉

48課：郷 秀男兄 小澤敬一兄

解説・ヨハネによる福音書②

ヨハネ福音書だけに見られる宣教3年の足跡。イエスさまは出来る限り多くの人々との出会いを願い、祭りのたびにエルサレムに上ったことがわかります。ヨハネ福音書に出てくるユダヤの祭りについて簡単に時期と内容を紹介しています。イエスさまが福音を携えてユダヤの地を巡っておられるお姿を思い浮かべることが出来たならば幸いです。

【ヨハネ福音書によるイエスの足跡】

宣教1年目 1～4章

<紀元30年春・エルサレムへ最初の訪問>

第41課「もっと偉大なことを見ることになる」(1:43-51)

第42課「救い主到来のしるし」(2:1-11)

●ガリラヤで宣教開始後、間もなく過ぎ越しの祭りのためエルサレムに上られた(2:13-21)

●イエスとニコデモ (3:1-21)

第39課「光は闇の中に」(3:16-21)

●弟子たちと共にユダヤの地でバプテスマを授けておられた (3:22)

●サマリアのスカルに行かれた (4:1-42)

第43課「心満たされる礼拝へ」(4:1-26)

●ガリラヤのカナに戻られた (4:43-54)

宣教2年目 5～6章

<紀元31年秋・エルサレムへの二回目の訪問>

●ユダヤ人の祭り(仮庵の祭り)がありエルサレムに上られた (5:1)

●春となり過ぎ越しの祭りをガリラヤで過ごされた (6:4)

第44課「パンのしるし」(6:1-15)

宣教3年目 7章～21章

<紀元32年秋・エルサレムへ三回目の訪問>

●仮庵の祭りに人目を逃れてエルサレムへ上られた (7:1-24)

●神殿から出て行かれ、エルサレムを離れられた (8:59)

<紀元32年冬・エルサレムへ四回目の訪問>

第46課「イエスさまのまなざしのもとで」(9:1-17)

第45課「良い羊飼いのもとで」(10:7-18)

●宮きよめの祭り(ハヌカ)のためにエルサレムに上られた (10:22)

●エルサレムを離れ、ヨハネが洗礼を受けた場所で滞在された (10:39-40)

第47課「わたしを信じるのか」(11:17-27)

<紀元33年春・ラザロのよみがえりとエルサレムへ五回目の旅>

●ベタニヤに戻り、ラザロを死からよみがえらせる (11:1-44)

●過ぎ越しの祭り前になつめやしの枝でイエスを迎えた (12:12-15)

第48課「栄光を現そう」(12:27-36)

●イエス、弟子の足を洗う (13:1-15)

●最後の晩餐 (13:21-30)

第49課「わたしはまことのぶどうの木」(15:1-17)

第50課「しかし、勇気を出しなさい」(16:25-33)

●イエスの祈り (17:1-26)

●イエスの逮捕、連行。ピラトの尋問 (18:1-19:16)

第51課「真理とは何か」(18:28-38)

●十字架と墓に葬られる (19:17-42)

第52課「成し遂げられた」(19:17-30)

●復活 (20:1-29)

第53課「わたしもあなたがたを遣わす」(20:11-23)

●ガリラヤで七人の弟子に現れる (21:1-25)

【ユダヤの祝祭】

現代のユダヤ人世界では日常的には西暦を用いますが、宗教的祝祭はユダヤ暦により守られています。西暦の9～10月にあたる月を新年(第7の月)としています。

西暦の秋

新年祭・・・第7の月1～2日 西暦の9月中旬ころ(ユダヤ暦)

贖罪の日(キム・ヨプール)・・・10日

仮庵の祭(スコット)・・・15～20日 40年間のシナイ半島の放浪を偲ぶ

律法祭(シムハット・トーラー)・・・仮庵祭の9日目「律法」を一年がかりで読み通した喜びを祝う

西暦の冬

宮きよめ祭(ハヌカ)・・・第9月22日から第10月2日

紀元前164年マカビの反乱での神殿奪還を祝う

西暦の春

過越祭(ペサハ)・・・第1の月、ニサンの月 15～20日

五旬祭(シャプオット)・・・第3の月 6日 過越祭から50日目に行われる主に新穀を捧げる祭り

参考図書 バイブルワールド ニック・ページ 2016年 いのちのことば社

ブックス・エソテリカ第13号 ユダヤ教の本 1995年 学習研究社

第45課「良い羊飼いのもとで」

聖書箇所：ヨハネによる福音書10章7-18節

主題聖句：イエスは答えて言われた。「イチジクの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もっと偉大なことをあなたは見ることになる。」
(ヨハネによる福音書1章50節)

ヨハネによる福音書には、イエスさまが「私は…である」とおっしゃる表現が7か所出てきます。6章では、「命のパン」、8章では「世の光」そして、本日の聖書箇所の10章7節では「羊の門」、11節では「良い羊飼い」であるとおっしゃっています。

イエスさまは当時のユダヤの人々にとって身近なものであった羊と羊飼いのたとえを使って、イエスさまとイエスさまに従う人との関係性について語られました。

エゼキエル書34章には、エゼキエルを通して主のみ言葉が次のように語られています。「牧者は群れを養わず、自分自身を養っている」と。民のことを顧みず、自分のことばかり考えていた指導者たちのために国が滅びてしまったことをおっしゃっているのです。

それに対して、イエスさまはご自身を「羊の門」であり、「良い羊飼い」とであると語られます。

羊は囲いから門を通して外に出て、昼の間、草を食べ、羊飼いに導かれて、囲いの中に戻って、夜の間休みます。羊飼いは、羊が迷い出たり、侵入者や狼などに襲われたりしないよう、門の前で寝ずの番をします。羊飼いが羊を守るように、イエスさまは私たちを守ってくださるのです。

羊飼いはいろいろな羊飼いがいます。雇われている羊飼いは、羊よりも自分の方が大切なので、羊が襲われた時には、羊を見捨てて逃げ出します。しかし、イエスさまは「良い羊飼い」なので、決して私たちを見捨てず、私たちのために命を捨ててくださるのです。

また、良い羊飼いは羊一匹一匹のことをよく知っています。そして、良い羊飼いのもとにいる羊は、羊飼いのことをよく知っています。羊飼いは羊一匹一匹の名前を呼び、その声を聞き分けます。羊も羊飼いの声を聞き分け、ほかの人について行ったりはしません。その関係性は、上下関係でも一方通行でもありません。深い愛と信頼によって結ばれているのです。

イエスさまは、羊のために「命を捨てる」と繰り返しおっしゃいます。それはイエスさまの十字架を表しています。イエスさまは私たちのために、私たちが永遠の命を得るために、十字架にかかってくださいました。イエスさまは十字架の上で命を捨てることにより、神さまによって復活されました。そして、私たちはイエスさまが十字架にかけられたことによって、豊かに命を受けたのです。ただ生きるのではありません。主を信じ、主に結ばれ、主の愛の中で豊かな人生を歩むことができるのです。

また、イエスさまは「囲いに入っていない羊も導かなければならない」とおっしゃいます。良い羊飼いに会えず、不安や孤独の中にいて、いつ、何に襲われるかわからない恐怖に震える羊を導く…つまり、ユダヤ人だけでなく異邦人をも招くことがイエスさまの使命であるということです。現代の私たちに置き換えて、私たちの周りには、「まだ神さまを知らない方」を導くと考えてよいと思います。

私たちはイエスさまのようにはなれませんが、良い羊飼いのもとで、羊飼いのお手伝いをすることはできるのではないのでしょうか？あなた方のそばにも、心から信頼し、安心してすべてをゆだねられる良い羊飼いにまだ出会っていない方がいらっしゃることでしょう。世の中には、様々な声があふれています。魅力的な声、優しい声、楽しそうな声…しかし、私たちを愛し、私たちのために命を捨ててくださる羊飼いの声は一つです。すべての人がその声を聞き分け、イエスさまの門を通過して囲いの中に入ることができるよう、私たちにできることをいたしましょう。

イエスさまの声を聞き分けた羊たちは、一つの群れとなります。そこには、自分とは価値観が違う人、性格が合わない人、わかり合えない人もいるでしょう。しかし、その違いを越えて、イエスさまを信じる者どうしが愛し合い、受け入れ合う時、イエスさまが望まれた群れができるのではないのでしょうか。

良い羊飼いに会えた恵みに感謝し、良い羊飼いを大きな声で賛美しながら、一匹でも多くの羊を囲いの中に導くお手伝いができるよう、祈りつつ歩んでまいりましょう。

～分かち合い～

- あなたは良い羊飼いの声を聞き分けることができますか？他の声に惑わされてしまったことはありますか？
- 良い羊飼いのもとで、どのような群れを作りたいと思いますか？あるいは、どのような群れに加わりたいと思いますか？

2月4日（日）ヨハネによる福音書10章7－18節

7イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。8わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。9わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。10盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。11わたしは良い羊飼である。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。12羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——13彼は雇い人で、羊のことを心に掛けていないからである。14わたしは良い羊飼である。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。15それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。16わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。17わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。18だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

「良い羊飼」と「羊」は信頼と安心に依って、互いの命を喜び合う関係とあります。教会ではイエスさまとクリスチャンが正に「良い羊飼」と「羊」の関係性にあります。国の指導者と国民の命との関係もそうであってほしいと願いますが、国のリーダーが良い羊飼であるためには執り成しの祈りが必要です。

2月5日（月）テモテへの手紙2章13節

わたしたちが誠実でなくても、
キリストは常に真実であられる。
キリストは御自身を
否むことができないからである。」

イエスさまの教えをパウロが理論的に体系化し、キリスト教とし、その教えを正しく宣教する教会と教会員の存在は実に大きな賜物です。

2月6日（火）ヨハネによる福音書15章13節

友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

「友のために自分の命を捨てる」は実際には簡単な事ではないし、そう云う事態になったら、家に居る妻や子供達の事を考えるでしょう。三浦綾子原作の映画「塩狩峠」を思います。

2月7日（水）イザヤ書56章8節

追い散らされたイスラエルを集める方
主なる神は言われる
既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。

イエスさまの言われる「ほかの羊」とは世界中のノンクリスチャンと云う事でしょうか。ノンクリスチャンへ聖書の事を話すのは難しいし、簡単には理解して貰えません。敷居が高く見られやすい教会へ来て貰うのにどうしたらいいか。試行錯誤の繰り返しです。

2月8日（木）エゼキエル書18章20節

罪を犯した本人が死ぬのであって、子は父の罪を負わず、父もまた子の罪を負うことはない。正しい人の正しさはその人だけのものであり、悪人の悪もその人だけのものである。

「ヨブ記」にも友人から因果応報の話が出ます。個人の事は個人の責任であって、親類縁者や他人の責任ではありません。神と個人の間の問題として解決しなければなりません。

2月9日（金）マルコによる福音書7章32－33節

32人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。33そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。

心身にハンディキャップを持つ方には、社会福祉制度など国の支援が必要ですが、十分ではないと感じます。同じ神さまの被造物として、何ができるかを考えさせられます。

2月10日（土）ペトロの手紙一3章13－15節

13もし、善いことに熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。14しかし、義のために苦しみを受けるのであれば、幸いです。人々を恐れたり、心を乱したりしてはいけません。15心の中でキリストを主とあがめなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。

明日2/11日は「信教の自由を守る日」です。世の中にはいろいろな宗教があります。強制的な宗教や詐欺まがいの宗教もあります。又イスラム教信者やヒンズー教徒、熱心な仏教徒もいます。私は宗教間の争いをせず、平和共存をしたいですね。

第46課 「イエスさまの

まなざしのもとで」

聖書箇所：ヨハネによる福音書9章1－17節、35－39節（参照9章18－34節）

主題聖句：あの方が神のもとから来られたのでなければ、

何もおできにならなかったはずです。（ヨハネによる福音書9章33節）

第46課は、参照箇所まで含めればほとんど9章まるごとがテーマとなります。イエスさまによる癒しの出来事は様々な箇所に記されていますが、「癒された後の出来事」についてここまで詳しく書かれているのは珍しいかと思います。今日は9章全体を通して、目の見えなかった人がどのように変えられていったかを考えたいと思います。

1節から12節までの場面。この人は、自分が生まれつき目が見えないことを「本人または両親の罪のせい」と見なす社会で生きていました。イエスさまの弟子ですらそのように考えていたことから、社会に深く根差した価値観だったことが分かります。

この人は自らイエスさまに癒しを求めたわけではなく、いわばイエスさまと弟子の問答に巻き込まれるような形で、癒しを得ました。主体的な行動が伴っていない点で、たとえばマタイ20章で「主よわたしたちを憐れんでください」と叫び、「目を開けていただきたいのです」と願い出た2人の人や、マルコ5章でイエスさまの服に触れ、「あなたの信仰があなたを救った」と癒された女性とは異なります。それゆえでしょうか、なぜ見えるようになったのかを問われた時の答え方が、どこか他人事のように、少なくとも言葉の上からは神の子イエスさまによって癒されたという感激、感動が読み取れません。

「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」

13節から23節までの場面。イエスさまが安息日に癒しを行ったことを責めたいファリサイ派の人々が、なぜ見えるようになったのかを再び聞きます。答え方はほとんど変わらず、淡々としています。

「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」

目の見えなかった人がこうした答え方をする背景については、2つの見方ができると思います。

1つは、自分の身に不思議な出来事が起きたのは理解しつつも、どのようなお方がそれをなさったのか、理解できていないという見方です。先述のように自らイエスさまに助けを求めたわけでもなく、またファリサイ派から「お前はあの人をどう思うのか」と聞かれたら「あの方は預言者です」とあくまで人間扱いしている点からも、そのように感じられます。

もう1つは、イエスさまがどのようなお方かは理解しつつも、それを公言する勇気が無い、という見方です。ファリサイ派の人たちは、見えなかった人の両親まで引きずり出して、証言を求めています。しかし両親は目が開いた理由や誰がそれをしたかについて答えず、「もう大人ですから、本人にお聞きください」と逃げてしまいます。この時すでにユダヤ人社会では、イエスさまを信じる人は排斥することが決まっており、両親もそれゆえに証言しなかったと聖書に記されています。見えなかった人も、同じ恐れを抱いた可能性はあるでしょう。

24節から34節の場面。ファリサイ派を含むユダヤ人たちは再び見えなかった人を呼び出し、詰問します。実は彼らの間でもイエスさまについて議論が分かれており、見えなかった人を癒したのが安息日だったから「罪人だ」と言う人もいれば、「罪のある人間がこのようなことをできるだろうか」と言う人もいたのです。見えなかった人への詰問は、「罪人だ」と見なしたい人たちが、その論拠を求めて行っていたように読み取れます。

さて、ここにきて見えなかった人の態度が変わり始めます。何度も同じことを聞かれるのに嫌気がさしたのか、「もうお話ししたのに聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか」と、そんなはずはないと分かっていたはずですが、やや挑発的な言い返しまでしています。

そして、神は罪人の言うことは聞かず、御心を行う人の言うことは聞く。あの方が神のもとから来られたのでなければ、見えない人の目を開くなんて出来なかったはずだ、と猛烈に反論を始めます。ここまで来ると、単にユダヤ人たちに苛立っていたというわけではなく、イエスさまが特別なお方であるという確信に基づき話していると言えるでしょう。周りにいるのはユダヤ人社会における有力者たちばかりです。目が見えないというハンディキャップを「罪の中に生まれたから」と見なすような人たちに取り囲まれ、両親でも逃げ出したようなプレッシャーにも負けず、力強く反論する姿は正に主にある奇跡です。見えなかった目が見えるようになる以上の変化が、この人には与えられたのです。

クリスチャンになるまでの歩みに重ねるならば、礼拝に出たり聖書を読んだりする中で徐々に「イエスさま」というお方の輪郭が自分の中に出来はじめ、人間社会における価値観と福音の差に気づき、信仰者として生きる決意をし始めた頃が、当てはまるかもしれません。

35節以降。見えなかった人のところに、再びイエスさまが来られました。彼がユダヤ人たちから追い出されたことを聞き、わざわざ来られ、「あなたは人の子を信じるか」と語りかけたのです。第41課の箇所にも出てきた「人の子」という言葉は、神さまと私たちの仲介者であるイエスさまご自身を指します。見えなかった人が即答で「信じます！」と言えはきれいに収まったかもしれませんが、聖書は「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが」と答えた姿を正直に記しています。つまり、イエスさまが「主」と呼ぶに相応しいほど特別なお方とは理解しつつも、神の子、救い主であると受け入れるには至っていなかったのでしょう。それでも、イエスさまから一言、「私がその人だ」と言われたことで、ついに本当の意味で信じる者へと変えられたのです。

皆さんが、イエスさまを“私の救い主”と受け入れるまでの道のりにもまた、十人十色の様々な出来事があったことと思います。しかし、どなたにも共通しているだろうと確信するのは、イエスさまの方から出会いに来てくださったことと、色々な人の言葉を耳にしつつも、最後の最後はイエスさまの言葉によって信仰に至る、ということです。ヨハネ9章に記された出来事は、そのまま私たちの人生に起きたことなのです。見える者に変えられた感謝と応答の思いを持って、歩んでまいりましょう。

～分かち合い～

- ・ イエスさまを信じよう！という“決め手”になった出来事や御言葉はありますか。
- ・ クリスチャンになる前となった後で、一番大きく変わったと思うのはどのようなことですか。

2月11日（日）ヨハネによる福音書9章1－17, 35－39節

1さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。2弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」3イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。4わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。5わたしは、世にいる間、世の光である。」6こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。7そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。8近所の人々や、彼が物乞いをしていたのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。9「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。10そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、11彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」12人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。ファリサイ派の人々、事情を調べる

13人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。14イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。15そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」16ファリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。17そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。

35イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。36彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」37イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」38彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、39イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えなくなる。」

ひとつ目の聖句、「盲人であった人」の答えが「あの方こそ救い主です」であっても良い場面だと感じますが、ファリサイ派の人々の間で意見が分かれる中、答え辛い状況であったと想像できます。たとえ「救い主です」と答えていたとしても、自分達が今まで学んで得た（神さまから見たらほんの少しの）知識や経験、ファリサイ派としての立場が邪魔をして、認めることは出来なかったでしょう。

2月12日（月）使徒言行録3章1－8節

1ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。2すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。3彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。4ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。5その男が、何かもらえんと思って二人を見つめていると、6ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」7そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、8躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。

「イエス・キリストの名によって」、イエスさまを信じている私たちもそれぞれの与えられた働きを実施するための力を御霊によって授かっています。神さまのご計画であれば、奇跡をおこなう力も与えられます。

2月13日（火）マタイによる福音書12章6－8節

6言っておくが、神殿よりも偉大なものがここにある。7もし、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう。8人の子は安息日の主なのである。」

「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」は、少し前のマタイ9:13にある有名な聖句「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である」に続いて記されています。（初めだけ少し違い、「わたしが好むのは～」ですが）ここに出て来るファリサイ人は自分達が正しい者でありたいために安息日にしてはいけないルールを神さまから言われていないことまで細かく定め、罪のない人々をそのための「いけにえ」にしていたとも言えますね。

2月14日（水）箴言26章12節

自分を賢者と思い込んでいる者を見たか。
彼よりは愚か者の方がまだ希望が持てる。

「自分を賢者と思い込んでいる者」、他の人より優れている部分があったとしても、神さまの目から見れば「どんぐりの背比べ」、自分の考えが一番正しいと思っている人が自分の想像をはるかに超える存在を認めることは困難なことなのでしょうね。



2月15日（木）マタイによる福音書8章5－13節

5さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、6「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」と言った。7そこでイエスは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。8すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。9わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」10イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきり言うておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。11言うておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。12だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」13そして、百人隊長に言われた。「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。

イエスさまが「わたしが行って～」とされているのに、「ただ、ひと言おっしゃってください。」という答え。イエスさまを感心させました。イエスさまから言葉を頂ければ、願いが叶うことを信じているからこそその言葉ですね。

2月16日（金）ルカによる福音書10章38－42節

38一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。39彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。40マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせているのですが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」41主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。42しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」は、少し前のマタイ9:13にある有名な聖句「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である」に続いて記されています。（初めだけ少し違い、「わたしが好むのは～」ですが）ここに出て来るファリサイ人は自分達が正しい者でありたいために安息日にはいけないルールを神さまから言われていないことまで細かく定め、罪のない人々をそのための「いけにえ」にしていたとも言えますね。



2月17日（土）ヨハネによる福音書12章1ー8節

1 過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。2 イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。3 そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。4 弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。5 「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」6 彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっていながら、その中身をごまかしていたからである。7 イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。8 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」

イエスさまが来られたその時に考えうる最高のおもてなしをするマリア。イエスさまはユダが裏で不正をおこなっていたことも（後に裏切ることも）ご存じであったでしょうが、そこには触れずにお答えになるイエスさま。イエスさまの言葉から徐々にその時が迫りつつある気持ちが溢れています。



第47課 「わたしを信じるか？」

聖書箇所：ヨハネによる福音書 11章 17－27節

主題聖句：「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

(ヨハネによる福音書 11章 27節)

イエスさまは今迄、ヨハネ書の中でもご自分のことを比喻で「わたしは命のパンです。」(6:35)「わたしは世の光である。」(8:12)等と言っておられます。が、今日の箇所では比喻を用いず、イエスさまご自身のことを「わたしは、復活であり命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」(25)と言われます。イエスさまが御父と一体の関係で行動しておられるという言明は、ユダヤ人たちをいきり立たせました。

ラザロの復活は、ベタニアでマルタとマリアの兄弟ラザロが病気になったことから始まります。(1～16) イエスさまがベタニアで泊まれたのは、恐らく彼らの家であったと考えられる程親しい関係でしたので、マルタはイエスさまのもとに人を遣わして、ラザロが病気であることを伝えました。イエスさまは彼らを愛しておられたので、重病の話聞いてイエスさまが直ぐに来て下さると考えていたようです。

しかし、ご慈愛に満ちたイエスさまは、直ぐにマルタたちの所に向かわず「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。」(4a)と言われてその場に留まりました。周りの人にはいったい何を言っているのか意味が分かりませんでした。ラザロのいるベタニア近くのエルサレムには、イエスさまの命を狙う人々が大勢いたので、ラザロの所に行かないイエスさまに弟子たちには正直安堵したことでしょう。が、マルタとマリアは(イエスさまが早く来て、助けて下さればいいのに、・・・)と内心歯がゆさもあり、首を長くして待っていたのではないでしょう。

病気の報告を聞いて二日が過ぎた時に、イエスさまは弟子たちに「もう一度、ユダヤに行こう。」と言われました。「つい最近も石で撃ち殺されそうになったのに、また行くのですか。」と引き留める弟子たちの行動も当然です。イエスさまが「わたしたちの友、ラザロが眠っているのです。わたしは彼を起こしに行く。」と言われるので、弟子たちは(ラザロは軽い病気で伏している)と誤解もしました。イエスさまは「ラザロは死んだのだよ、私がそこにい合わせなかったのは良かった。」(14b-15a)と言われました。完全なる死を迎えたことを「良かった」ということに弟子たちも「はてな？」と思ったのでしょうか、迫害の死を覚悟でついていくことになりました。

イエスさまと戸惑う弟子たちの会話が絵の様にして頭に浮かんできます。そのようにして弟子たちと、イエスさまのお考えになっておられることがみごとにちぐはぐしている中、イエスさまが弟子たちに一つ一つ丁寧な言葉でお答えになっておられる中に、イエスさまが弟子たちに一番知って欲しいことがあったのです。

イエスさまがベタニアに着いてみると、ラザロが墓に葬られてから既に4日経っていました。ユダヤの女性の間では、埋葬後7日間泣き、嘆き悲しむ習慣でしたので、多くのユダヤ人がマルタとマリアを慰めに来ていました。

イエスさまをお迎えしたマルタは、多少の恨みがましさと信頼を吐露します。すると、イエスさまは「あなたの兄弟は復活する。」と言われました。「終わりの復活の時に、復活することは存じています。」と返事しました。ファリサイ派ユダヤ人が信じる、未来の復活の日に主を信じる者が復活するということは、ラザロを失った今、現実の悲しみにくれるマルタにとって、「もし、イエスさまがいて下さったら・・・」と思うと、心に響く慰めの言葉とはならなかった様です。ラザロが今ここで復活することは、とても考えにも及ばないことでした。

イエスさまは続けます。「わたし自身が復活であり、命である。わたしを信じる者はたとえ、死んでも生きる。」(25) この「わたし」が復活したイエスさまで、「命」とは神様が与えて下さる霊の命です。命の霊は死んでも、わたしを信じた者の霊は生きます。

「生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」(26)

復活したイエスさまを信じて、その復活したイエスさまと結ばれて生きる者は、永遠の命を生きているのですから、この命はいつまでも死ぬことはありません。と言われたのです。

「このことを信じるか、」と聞かれたマルタは、この重大な真理をどこまで理解していたか分かりませんが「はい、主よ、あなたが世に来られるはずのメシアであると信じております。」(27)と立派な信仰告白をします。

イエスさまが十字架におかかりになる前のお話です。

その後、マリアもお会いしたイエスさまに対して、「主よ、もしここにいて下さいました私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」と姉と同じことを言います。彼女と彼女に同情した友人たちが悲しみのあまり泣き叫ぶ(クライオー)をご覧になって心に憤りを覚え、心の動揺を感じられて涙を流されました。追い打ちをかけるように、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロを死なないようにはできなかったのか。」と言う人々もいました。「もう4日も立っていますから、臭います。」と諦めるようなマルタの言葉です。再び、心に憤りを覚えたとあります。

イエスさまは「父よ、私の願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いて下さることを、私は知っています。しかし、私がこういうのは、周りにいる群衆のためです。あなたが、わたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」(42)こう言うってから「ラザロ、出て来なさい。」と大きな声で叫ばれ、ラザロをよみがえらせました。何という素晴らしいしるし(奇跡)でしょうか。

「この他にも、イエスは弟子たちの前で多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなた方が、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」(ヨハ20:30,31)とあります。

誰よりも私たち一人一人を愛して下さる主に「はい、あなたが復活された神の子メシアであると、わたしは信じております。」とお答えできる者になれば幸いです。

～分かち合い～

- 後に、神さまのご計画を知ることになった経験はありますか？

2月18日（日）ヨハネによる福音書 11章 7－27節

17さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。18ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。19マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。20マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。21マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。22しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」23イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、24マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。25イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。26生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」27マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

私が20歳のときに、高校生の弟が事故で亡くなりました。御国での再会の希望を信じていましたが、この世の別れは本当に辛く悲しく「神さまどうしてですか？なぜこんなひどいことが我が家に起きるのですか？」毎日そんな祈りばかりしていました。失われたことに非常に執着していたんだと思います。

2月19日（月）ヨハネによる福音書 11章 35節

イエスは涙を流された。

大声で泣いている人たちの中で、イエスさまだけは声を出さず沈黙して涙を流されました。より深い悲しみが伝わってきます。イエスさまが自分のために泣いているという箇所は聖書には一度も出てきません。愛するイスラエルのため（ルカ19:41）、そして愛する友ラザロのために涙を流されています。すべての人の救いを願うイエスさまの愛は涙となってあふれました。

2月20日（火）列王記上 17章 17－24節

17その後、この家の女主人である彼女の息子が病気にかった。病状は非常に重く、ついに息を引き取った。18彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはわたしにどんなかわりがあるのでしょうか。あなたはわたしに罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」19エリヤは、「あなたの息子をよこしなさい」と言って、彼女のふところから息子を受け取り、自分のいる階上の部屋に抱いて行って寝台に寝かせた。20彼は主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか。」21彼は子供の上に三度身を重ねてから、また主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命を元に返してください。」22主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子供は生き返った。23エリヤは、その子を連れて家の階上の部屋から降りて来て、母親に渡し、「見なさい。あなたの息子は生きている」と言った。24女はエリヤに言った。「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です。」

心から神を信頼し思いを込めて祈るとき、たとえその祈りの通りにならなかったとしても、必ずその祈りに対して主の応えが与えられます。祈りましょう。どんなことでも、どんなときでも。

2月21日（水）使徒言行録16章25－34節

25真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。26突然、大地震が起り、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。27目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げたしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。28パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」29看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、30二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」31二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」32そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。33まだ真夜中であつたが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。34この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。

私たちはどんなに状況が暗く陰しくとも神に祈り賛美できるという特恵が与えられています。真夜中に大地震が起き獄舎のとびらが全部開くという奇跡以上に、このような状況でも神を信頼し、祈り賛美するということはまさに奇跡と言えます。

2月22日（木）ヨハネによる福音書11章45－53節

45マリアのところに来て、イエスのなさったことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。46しかし、中には、ファリサイ派の人々のもとへ行き、イエスのなさったことを告げる者もいた。47そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集して言った。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。48このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう。」49彼らの中の一人で、その年の大祭司であつたカイアファが言った。「あなたがたは何も分かっていない。50一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか。」51これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であつたので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。52国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。53この日から、彼らはイエスを殺そうとたくらんだ。

カイアファは民全体を救うためにイエスを殺そうと提案しますが、イエスさまは神の民が救われ、彼らが一つになるために死のうとされていました。「世界の人々が一つになるように」これはイエスさまの痛切な願いだったので。今、私たちはこの主の思いを受け継ぎ、教会の働きが豊かに用いられるよう共に祈ってまいりましょう。

2月23日（金）マルコによる福音書14章32－36節

32一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。33そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、34彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」35少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、36こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

父なる神の御心よりも自分の意思を優先させるならば、何事もうまくいかないということを、イエスさまは知っておられました。大切な決断をするときはいつも熱心に祈っておられるイエスさまの姿があります。外国のスポーツ選手が試合前に胸の前で十字を切っている姿を見ることがあります。大切なときに祈りによって力をいただきよいプレーができることを確信しているのでしょうね。

2月24日（土）ルカによる福音書3章21－22節

21民衆が皆洗礼（バプテスマ）を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、22聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

天が開け、聖霊が降って来て、天から声が聞こえた。これは「イエスこそ神の子・救い主」であることを証明する出来事です。そしてこのことはイエスさまが祈っておられるときに起こりました。生涯の大切な場面で、いつも主は祈っておられます。





第48課 「栄光を現そう」

聖書箇所：ヨハネによる福音書12章27－36節

主題聖句：光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。

(ヨハネによる福音書12章36節)

今週の聖書教育誌の週題は「栄光を現そう」です。神の栄光とは何でしょうか。神の栄光とはあらゆる面で完全であられる神の尊さ、偉大さ、素晴らしさです。私たちには神ご自身の御姿を図り知ることは到底出来ません。神ご自身が私たちにご自分をお知らせくださったので、神についての真理、神との人格的な交わりが赦されているのです。これを「啓示」と言いますが、神の栄光は創造と贖い(救い)の御業によって啓示されています。キリスト教信仰は、人類の創造主であり、贖い主である真の神を礼拝し、仕えることなのです。

ヨハネ福音書の12章からは「受難週」によいよ入ります。イエスさまは過越し祭の六日前(金曜日)にエルサレムから3Kmほど離れたベタニヤに着かれました。土曜日は友人であるマリヤ、マルタ、ラザロの家で過ごされたのでしょうか。日曜日、ろばに乗ってエルサレムに入城されました。人々はなつめやしの枝を持って盛大に出迎えました、預言者ゼカリヤの預言は成就したのです。

ゼカリヤ9:9

娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歡呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者 高ぶることなく、ろばに乗って来る 雌ろばの子であるろばに乗って。

イエス様の入城を歓迎した人たちは、イエスさまに自分たちの期待を重ねて後を追った人たちであり、心からイエスさまに従っていたわけではありませんでした。彼らの多くは数日後には十字架につけろと叫ぶのです。私たちもただキリストの後を追う者ではなく、私たちが遭遇するあらゆる困難な状況であっても振り回されることなくイエスさまに忠実に従う者でありたいと改めてですが思われています。

12:27 「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。

ヨハネ福音書は共観福音書にあるゲッセマネの祈りを記してはいませんが、「心騒ぐ」「救ってください」と人間的な思いが語られています。誰であっても、この若さで死んでしまうことなど、ましてや十字架によって命をとられることなど望む筈がありません。イエスさまは神の子だから悩み苦しむことなどあろう筈がないと考えてしまいます。けれども、私たちと同じありのままの人になられた故に心の平静さを保つことに苦しまれたことでしょうか十字架への道を選び歩まれたのです。

イエスさまの栄光は私たちの罪の贖いとして罪なき全き人として十字架に架かり救いを完成させることでした。人としての極度の恐れにありながらも十字架への道を歩む真の勇気を現わされたのです。

12:28 父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」

イエスさまは十字架を受け止められたのです。父なる神は天地万物、被造物である私たちの創造と御子イエスにより多くの奇跡のわざ、み言葉により、その臨在と力とをお示し(啓示)になりました。

再び「栄光を現そう」は父なる神の言葉であり、イエスさまの言葉でもあります。栄光の先には信じる私たちに十字架を通しての罪からの贖いと、神の裁きからの救いと永遠の命の約束があるのです。

すなわち神との和解が実現するのです。

12:35 イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないうちに、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。

12:36 光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」

「人の子」という民衆の問いかけにはお答えにならず、光に出会ったならば光であるイエスご自身を信じるようにと言われました。今は議論している時期ではなく、イエスさまを信じて一歩を踏み出すとき(応答)であると言われたのです。私たちの住む世界はいつの時代であったとしても、暗闇の世界です。その中で光を見たならば、出会ったならば、その時が決断のときであり、信じるときなのです。

私自身も振り返ってみたときに確かに出会ったと確信しています。

～分かち合い～

- ご自分が「光の子」であると思わされた体験を分かちあってみましょう。

2月25日（日）ヨハネによる福音書 12章27－36節

27「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。28父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」29そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。30イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。31今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。32わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」33イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。34すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。」35イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分らない。36光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」

「今、私は心騒ぐ」イエスさまは生身の人間として生きておられます。これから捕らえられて、弟子たちにみすてられ、いばらの冠をかぶせられ、侮辱され、ムチ打たれます。血だらけの体で十字架をせおわされ、手足を釘で打たれ、十字架にかけられます。すべて私たちの罪のために。「わたしはまさにこの時のために来たのだ」これが栄光ならあまりに悲しいです。それでも私たちのために言われます。「光を信じなさい」イエスさま、ありがとうございます。

2月26日（月）ヨハネによる福音書 6章41－44節

41ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのことでつぶやき始め、42こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか。」43イエスは答えて言われた。「つぶやき合うのはやめなさい。44わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。

ユダヤ人は「大工のヨセフの息子のイエスではないか、天から降ってきたと言うのか」理解ができませんでした。聖書を知らなければ、誰もそう思うでしょう。イエスさまは私たちを愛してくださり、ひとりでも多くの人を救うために来られました。喜びと永遠の命が得られるようにと。イエスさま感謝致します。

2月27日（火）ヨハネの手紙一 | 章4 | - 44節

5わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということです。6わたしたちが、神との交わりを持っていると言いながら、闇の中を歩むなら、それはうそをついているのであり、真理を行ってはいません。7しかし、神が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。

「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」私たちは暗闇も好きなのです。誰の心の中にもサタンがいます。恨み、嫉妬、差別、さまざまな欲望。サタンは暗闇を好みます。しかし、光はそれらをおさえる事が出来ます。暗闇の中に、昇る朝日のひとすじの光。その神々しさ。不安を消し去り、安心と希望を与えてくれます。「光を信じなさい」イエスさま、ありがとうございます。

2月28日（水）ヨハネによる福音書 | 2章36 - 43節

イエスはこれらのことを話してから、立ち去って彼らから身を隠された。37このように多くのしるしを彼らの目の前で行われたが、彼らはイエスを信じなかった。38預言者イザヤの言葉が実現するためであった。彼はこう言っている。

「主よ、だれがわたしたちの知らせを信じましたか。

主の御腕は、だれに示されましたか。」

39彼らが信じる事ができなかった理由を、イザヤはまた次のように言っている。

40「神は彼らの目を見えなくし、

その心をかたくなにされた。

こうして、彼らは目で見ることなく、

心で悟らず、立ち帰らない。

わたしは彼らをいやさない。」

41イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い、イエスについて語ったのである。

42とはいえ、議員の中にもイエスを信じる者は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々をはばかりて公に言い表さなかった。43彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである。

議員の中にもイエスを信じる者は多かった。ただ会堂から追放されるのを恐れ、公(おおやけ)に言い表さなかった。上の立場の人には逆らえない、身の安全の為に。今の社会もそういう状況が多いです。権力や上の立場を利用して押さえつける。でも、それは崩れます。神さまは良い方向、正しい方向に導かれます。

2月29日（木）イザヤ書5章1－2節

1 わたしは歌おう、わたしの愛する者のために
そのぶどう畑の愛の歌を。
わたしの愛する者は、肥沃な丘に
ぶどう畑を持っていた。
2 よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。
その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り
良いぶどうが実るのを待った。
しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。

わたしの愛する者は肥沃な丘に、よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。神さまに愛される私たちは豊かな生活をめざし、森を開拓し、日々働き、便利なものをつくり続けました。今コンクリートの中に住み、便利な機械に囲まれて快適に過ごしています。昔あった自然はなくなって行きました。豊かな生活になったのですが、何か大切なものを失っていったような気がします。イエスさまはその失った大切なものを教えて下さいます。

3月1日（金）エゼキエル書19章10－11節

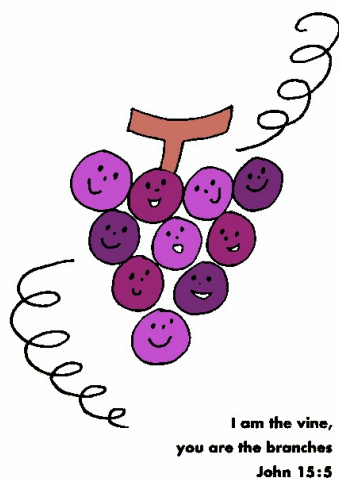
10 お前の母は水のほとりに植えられた
園のぶどうの木のようなのだ。
多くの水のゆえに
豊かに実を結ぶ枝を張った。
11 その木には
支配者たちの杖となる強い枝があった。
丈は雲間に届くほど高くなり
丈高く、枝が多いゆえに際立って見えた。

お前の母は水のほとりに植えられた。園のぶどうの木のようなのだ。多くの水のゆえに豊かに実を結ぶ枝を張った。その枝は強く、高く、多いゆえに際立って見えた。支配者たち、権力者たち、神をも恐れず、自分が頂点だと思い込んでいる。多くの犠牲の上に立ち、その下にいる人びとが、どれほど苦しんでいるかを知らない。神はその木を引き抜き、投げ捨てられた。あなたたちもきっと、その運命をたどるでしょう。

3月2日（土）ヨハネによる福音書14章27節

わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。

「わたしは平和を与える。世が与えるように与えるのではない」それは十字架によって示されると。でも、十字架はあまりにも悲しいです。イエスさまは言われます。「互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」と。ありがとうございます。いつまでもいつまでも、イエスさまに繋がっています。



I am the vine,
you are the branches
John 15:5

2024.2 成人科